

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

2019年の展望を考えるに当たり、昨年2018年を振り返ってみると、当初想定していたように2017年と同様のレンジ相場が継続してしまいました。

年間の値幅は10円を下回り過去最少、2017～2018年の2年間を通して値幅は14円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、年明けの1月3日に108円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドルが短期間に4円以上の下落という動きが引き起こされました。

107円半ば以下では、公的年金のドル買いのうわさもあり、現在ではややドルが持ち直していますが、依然不透明な状況が続いています。

1

本資料は、情報提供を目的としており、投資勧誘を目的とするものではありません。掲載している情報については万全を期しておりますが、その内容について保証するものではありません。投資の最終判断はお客様ご自身でなさるようお願い致します。本資料により生じたいかなる損害については弊社及び執筆者には一切の責任を負いかねます。

ドル/円相場のトレード戦略

今後の相場は、米経済の成長が鈍化するのか、それに伴って米国の利上げが打ち止めとなるのかが注目されることになるでしょうが、1月の米FOMCでは声明文から追加利上げのバイアスが削除されたことにより政策スタンスが大きく変わった可能性が指摘されており、当面度の上値は限られたものとなりそうです。

ただし、2月の米雇用統計は好調を維持しており、目先は明確なファンダメンタルズの変化が起きることも期待しにくいことや米国の貿易交渉の行方が不透明なこともあり神経質な動きが予想されます。

1月3日のドル急落でポジション調整も進んだものとみられることから一段の大幅ドル安には向かわない可能性が強いものと考え、当面は105円～110円程度をコアレンジとする動きが続きそうです。

■短期展望

先週は、市場参加者のセンチメントが改善する中、110円台半ばから後半でドルの底堅い動きが続いたものの、米長期金利が依然2.6%台で低迷しており、金利面でのドル高への追い風も乏しく111円台乗せは阻まれました。

今週も投資環境に大きな変化はなく、明確な方向感に欠ける動きが続きそうです。

米経済指標や金融当局者の発言をにらみながら、先週同様110円台での取引が続くものと思われ、109円半ばから111円半ばのレンジを想定しています。